



年 頭 の 御 挨拶

坂 本 忠 彦*

新年明けましておめでとうございます。

昨年を振り返りますと日本大ダム会議の活動は国際大ダム会議2012京都大会が成功裏に開催されたことにつきます。

国際大ダム会議第80回年次例会及び第24回大会（京都大会）は昨年6月2日から8日にかけて京都国際会館を主会場として70ヶ国から1,367名（そのうち日本からの参加者408名）の参加を得て、多くの成果をあげて成功裏に開催されました。大会主催団体を代表して厚く御礼申し上げます。

日本は国際大ダム会議に1931年に参加しました。1960年および1984年に現在の年次例会に対応する会議を開催した以降、常に多くの技術委員会の構成国になるとともに年次例会、大会に多くの参加者を派遣するなど国際大ダム会議の活動に積極的に寄与してきたため、大会開催要望が多くの加盟国より寄せられていたところでした。そして諸先輩は国際協力委員の創設、開催資金の備蓄、日中韓の東アジア地域ダム会議を通じての国際会議運営知識の充実など着実な準備を行ってこられました。2006年のバルセロナ大会におけるBerga 総裁からの大会開催要望を受けて以来、各種の検討・準備を重ね2009年のブラジリア大会で京都での開催が決定されました。

京都大会は従来開催実績より3日程度開催期間を短縮し、参加者はシャトルバスではなく地下鉄を利用するなど、日本独自の企画が多くありましたが、多くの参加者からは好意的に受け止められました。

2011年3月11日には東日本大震災が発生、さらには福島原子力事故により外国人の来日者数が激減するなどの事態が生じましたが、震災の影響のない京都での開催であることも幸いして、多くの参加者を得ることができました。

開催につきましては多くの団体よりご支援をいただくとともに日本大ダム会議会員各位には積極的に御協力、御支援を賜りました。日本大ダム会議は常勤職員4名の小さな団体です。国際大ダム会議組織委員会の下、多くの分科会の活動は経費削減のため日本大ダム会議会員のボランティア活動で行われました。改めて関係者のみなさまにお礼申し上げます。

* 一般社団法人日本大ダム会議 会長、日本工営(株) 顧問

例会、大会では多くの成果を上げることができました。大根義男愛知工業大学特任教授が国際大ダム会議貢献賞を受賞された後にお亡くなりになったことも懐かしい思い出となりました。

国際シンポジウムでは5会場で120名の口頭発表のほか、多くのポスターセッションも行われ、3名の40歳以下の優秀発表者に京都ヤングエンジニア賞が授与されましたが、この試みは今後の国際シンポジウムの手本となりつつあります。

展示会場では50団体から80ブースの出展があり、日本からは各企業の出展とは別に日本ダム協会によるRCD工法、CSG工法、ダムの機能アップ技術、ITを利用したダム建設技術などの企画展示がありました。これは各国の注目を集め、多くの問い合わせが来ており、日本の技術紹介さらには海外展開に寄与するものとして期待しています。

京都大会はVivo事務局長が「誰からも不満は聞いていない。すばらしい大会であった。」と閉会式で述べられたように日本人の企画力、実行力が集結したすばらしい大会であったと確信しているところです。経費的にも予算の範囲で収まり、現在は「京都大会記録誌編集分科会」が本年3月末に記録誌発刊を目指し活動しているところです。

ところで「今後の治水対策のあり方に関する有識者会議」の答申に基づくダムの再検証により、建設継続あるいは建設中止などの結論が除々ではありますが出てきています。その結果かなりのダムが中止となり、ダム事業全体の活力が小さくなりつつあり、その影響を受けている会員企業が多くあります。また、原子力発電所の運転中止に伴い、経営が悪化しつつある会員企業がかなりあります。このため、日本大ダム会議の会費納入実績がここ数年減少を続けており、日本大ダム会議の経営が苦しくなりつつあります。このため昨年10月に事業運営方針検討分科会（分科会委員長、濱口達男氏）を設置し、日本大ダム会議の将来の活動の方向性について検討を行っているところですが、当面は経営的に苦しい状況が続くことはまず免れないでしょう。

本年8月にはシアトルで第81回国際大ダム会議年次例会が開催されます。京都大会を受けてのダム事業の海外展開の足掛かりとなる例会になることを期待したいと考えています。

皆様には日本大ダム会議の活動につきまして本年もよろしくご指導、御協力を賜りますよう御願ひ申し上げ、年頭の挨拶といたします。